

アーネスト・F・フェノロサ

京都大学名誉教授
村形明子

いま学ぶべき、媒介の精神

日本の美を見たフェノロサの心

文明開化に明け暮れた明治は、日本の美の危機の時代でもあった。

フェノロサはその危機を前に、伝統芸術の再生と世界への紹介に身を捧げた。

彼は自分自身について、こんな不思議な問いかけを残している。

「しかし知られないのが最上の知識を、彼にもたらさず私はいったい何者なのか——」^①

青年フェノロサのルーツ探し

アーネスト・F・フェノロサがハ

ーヴァード大学卒業の一八七四年同期会誌に寄せた「自己紹介」^②によれば、

故郷セーラムの旧家の長女であ

ったメアリー・シルスビー、母方の

系図は明らかで、係累もボストン周

辺に多いが、スペイン移民の音楽家、

ピアノ・オルガンディラーのマヌ

エル・フランシスコ・チリアコ・フ

エノロサ、父方の祖先については曖

昧模糊としている。そして冒頭から

唐突に次のような空想に走る。

アメリカ原住民、特に彼らの中、

文明度の高い部族に対する私の関心

は常に高かった。思うに、彼らの物

語はその愛、闘い、憧憬や発展とと

もに、もっと知られた諸国民の年代

記が提供する以上に感銘深い人間性

の歴史をふくんでいる。またその美

豊かに息づく自然誌、その一部をな

す有色の子供たちとともに、未発見

のアメリカは、それ自体自然であり

ながら、世界全体を見渡す時、その

近親性により私たちの目をくらし、

自然に敵対するように見える東洋文

明の偏見と慣習に曇り染まることな



1886年頃、長男カノー(1880-87)を抱くフェノロサ(著者蔵)

Profile

アーネスト・F・フェノロサ
Ernest Francisco Fenollosa
1853-1908
米マサチューセッツ州生まれ。
1874年ハーヴァード大学卒業。
78年来日し、東京大学教授
として政治学、経済学、社会学、
哲学、論理学の講座を担当。古
美術の収集・研究を続け、岡倉
天心らと日本美術の復興運動に
取り組む。東京美術学校の設立
に参加。90年に帰国後、ポス
トン美術館の東洋部主管となる。
滋賀県の三井寺法明院に眠る。

どの貴族の多くの祖先であり、過去
三百年の間に姓が改変し、今日南ス
ペインの貴族アルヴァレス家はアル
ヴァラド直系の子孫と称している、
ということだが、いかにも菌切れの
悪い父祖伝ではある。
ここでは引用部分の日本との関わ
りに留めるが、青年フェノロサのい
う「それ自体自然でありながら、世
界全体を見渡す時、その近親性によ
り私たちの目をくらし、自然に敵
対するように見える東洋文明の偏見
と慣習」は気になるところである。
これは当時アメリカ・インディアン
と称されていた原住民を、イギリス
植民地インドにリンクする東洋的蔑
称から解放しながら、「高貴な野蠻
人」の美称を冠せ、自らの父系の曖
昧なルーツ探しに利用しようと思っ
た中で否定的東洋イメージといえ
よう。

く、世界と人間の最も真実なイメ
ジを提供するものと思われる。そこ
で私はわが祖先の一部をそれらの種
族に見出せないかとよく考えたもの
である。そして単にその可能性のみ
ならず、そのような祖先の強力な蓋
然性を与える鍵を見つけた。
わが曾曾曾曾曾曾曾曾曾曾曾
(およそその辺の)祖父はコルテスの
遠征の頃のメキシコ、トラスカラ
族の族長、ヒコテンカトルと信ずる
に至った。その族長がスペイン人キ
ャプテンアルヴァラドに洗礼名ルイ
ーザという娘を与えたのだ。(中略)

ワシントン・アーヴィングはアメリ
カ発見の初期スペイン船団の一つに
所属するペナロサという水先案内人
に言及している。
この後、フェノロサは引用最後の
部分を記憶違いと訂正して「さらな
る調査の結果、グリヤルバのユカタ
ン遠征の監督官がペナロサという名
前だった、とベルマル・ディアスが
言っており、アルヴァラドは同じ遠
征の隊員であった」と付記している。
アルヴァラドとルイーザ・ヒコテン
カトル夫妻が近代スペインのほとん